

令和5年度 学校自己評価システムシート （さいたま市立 大谷場 小学校）

学校番号 015

目 指 す 学 校 像	学校に関わる全ての人々が、自ら多様な個性を生かしながら、子ども一人ひとりの輝く瞳と笑顔の実現に向けて協働する学校。
重 点 目 標	1 学ぶ意欲や自己肯定感を高めるカリキュラム・マネジメント（学びの自律、探究的な学びの充実） 2 子ども一人ひとりが安心して学び、進んで運動する教育環境整備（子どもの姿の共有、健幸づくり） 3 親和的コミュニケーションでつながる、つなげる教育活動の展開（開校70周年記念行事など） 4 教職員がやりがいを感じながら学び合い、力を発揮する教職員研修（非認知能力の育成）

達	A	ほぼ達成（８割以上）
成	B	概ね達成（６割以上）
度	C	変化の兆し（４割以上）
	D	不十分（４割未満）

学 校 自 己 評 価								学校運営協議会による評価
年 度 目 標				年 度 評 価				実施日令和6年2月9日
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1	〈現状〉 ○情報機器や学校図書館の活用について教職員、児童ともに肯定的な意識が高い。 ○児童向けアンケート結果等から、「自分の考えを進んで発表できる。」「課題の解決に向けて自分で考え、進んで取り組んでいる。」と自信をもって答えられる児童の割合が他の項目と較べてやや低い傾向が見られる。 〈課題〉 ○よりデジタルの優位性を生かした、情報端末の効果的な活用方法を学校全体で共有し、個別最適な学びの実現を図る。 ○民間企業や日本赤十字社など新たな外部講師を積極的に招聘し、小学校金融経済教育や STEAMS TIME といった探究的な学びを実践していく。	・児童が ICT を活用する学びにより、自ら考え、判断し、表現する力を育む授業実践、カリキュラム・マネジメント	・指導計画を工夫することで、児童が端末を活用し、教室だけでなく、家庭でも調べたり、共同でまとめたりする学習に取り組めるようにする。 ・配布物、教材や長期休業中の課題などのデジタル化を進め、必要な時に、児童、保護者が閲覧、活用できるようにする。	①情報端末やデジタル教材について、低学年では、学習に使うことができるようになったか。中学年では、課題解決のために使うことができるようになったか。高学年では、教室外でも活用できたか。 ②学校だよりなどの配布物、教材や長期休業中の課題のデジタル化を進めることができたか。	・アンケートで高学年児童の約9.5%が「タブレットを様々な場面で使い、自分の学習を深めることができた」と肯定的に回答している。一方、「長期休業等タブレットの学習利活用」について、肯定的な回答の割合は、児童で約6割、保護者で約5割にとどまっている。 ・学校だより等のデジタル化について、保護者から「手紙をなくすなど心配がへった」「必要なときにすぐにHPで見られる」といった声が寄せられている。	B	・低学年段階から学習者用タブレット等の情報端末を活用した学習を積極的に行う。 ・情報リテラシーの育成について、発達段階に応じた目標や内容を記した計画を作成し、教職員、児童、保護者等で共有する。 ・目的、内容といった特性に応じて配布物や長期休業中の課題のデジタル化を進める。	ICTの活用については、学習者用端末の持ち帰りと併せて、家庭の端末等で課題に取り組めるようにするとよい。デジタルをうまく使い、教員が課題を提示し、児童の解答、回答から役立つ情報を集め、それらを踏まえて授業、取組を改善していくとよいのではないかと。子どもの情報端末活用を進めると同時に、ネットいじめや不適切な使い方をしないよう、計画的に情報リテラシーを育むことは大切である。
		・探究的な学びにより、学ぶ意欲や自己肯定感を高める授業実践、カリキュラム・マネジメント	・SDGsに関する学習、小学校金融経済教育、STEAMS TIME 等の探究的な学びを積極的に取り入れ、自己肯定感を高め、よりよい生き方について考える力やよりよい社会をつくる一員としての自覚を培う。	③各学年で民間企業等外部講師を招聘した学習、教員と児童がともに学び、試行錯誤しながら課題の解決を目指す探究的な学びを実施することができたか。	・各学年で見学や体験的な学習を取り入れ、課題解決的な学習、探究的学びを行った。 ・開校70周年関連の取組をPTA、地域と協働して進めてきた。アンケートで「様々な人とのかかわりの中で、自分の考えを深めている」「これまでの体験や学習を生かしながら、進んで学んでいる」と肯定的に回答した割合はいずれも9割を超えた。	A	・民間企業等外部講師を招聘した学習、教員と児童がともに学び、試行錯誤しながら課題の解決を目指す探究的な学びを年間計画等に位置付けることで、より見通しをもちながら継続的に取り組めるようにする。	
2	〈現状〉 ○あいさつやいじめの防止について、児童会によるキャンペーンや自主的なゴミ拾い活動など、児童が主体的に取り組む姿が見られる。 ○学校評価に係るアンケートで、「場面や目的に応じて丁寧な言葉遣いができる」と肯定的な回答をした保護者の割合が比較的低い。 ○運動時間の減少や学習以外のスクリーンタイムの増加などの傾向、3年に渡るコロナ禍により、運動する意欲や気力の低下が危惧される。 〈課題〉 ○児童相互、学校と家庭のより一層あたたかな関係づくり。 ○児童が自分から進んで運動できるようにする。	・学校と保護者が子どもの姿を共有し、支援の在り方を話し合う機会の創出	・新たに2学期にも個人面談を設定し、学習状況や児童のよさを共有できるようにする。 ・学校課題研究における「考え、議論する」道徳の授業づくり、授業実践研究の成果を生かした取組を進める。	①全ての児童家庭について年間1回、8割の児童家庭について年間2回以上の面談を実施することができたか。 ②授業参観等の機会に、道徳科の授業を公開するなど、保護者の理解を深め、協力を得ることができたか。	・アンケートで保護者の約8.4%が「学校と家庭で子どものよさがぐんばり共有することができている」と肯定的に回答した。 ・全ての学級で、道徳科の授業を保護者向けに公開した。児童と保護者が一緒に考える場面を設けるなど、授業展開を工夫した。	A	・年間2回の個人面談（全員・希望）及び教育相談日の取組を継続する。年度当初に年間日程表を作成し、学校HPに掲載、周知することで、保護者が活用しやすい状況にする。	評価項目の達成状況や今年度の取組等を踏まえれば、A評価は妥当である。体育の授業が楽しい背景には、教員の授業改善の努力がある。「体育の授業が楽しい」と自信をもって答えることができない児童にも目を向けた授業改善、取組も大切にしてほしい。自由な雰囲気のもと、遊びの延長線上で運動に慣れ親しむような方向性を大切にしてほしい。
		・より多くの児童が楽しく、自分から進んで学び、運動できる場、機会の創出	・日課を工夫し、運動の時間、機会を増やす。（昼休みの新設、運動を自分で選び決める機会づくり） ・学習室等を整備し、必要な時に、必要な児童が落ち着いて学ぶことのできる環境をつくる。	③児童が「体育の授業が楽しい。」と感じているか。また、運動会や体力向上の取組に進んで参加しているか。 ④児童が落ち着いて学習に取り組めているか。	・アンケートで「体育の授業は楽しい」と肯定的に回答した児童の割合は低・中・高学年でいずれも8割を超えた。 ・アンケートで「子どもは落ち着いて学校生活を送ることができている」と肯定的に回答した保護者の割合は約8.4%だった。	A	・目的を明確にし、児童の実態を踏まえた体育授業、体力向上の取組、運動会等体育的行事の工夫改善に取り組む。 ・市教委が進める「Sola ルーム」について、本校の実態に合わせて運用し、家庭地域の理解、協力を得る。	
3	〈現状〉 ○令和4年度に立ち上がった、本校学校運営協議会では、目指す児童の姿について熟議を積み重ね、「親和的なコミュニケーション力」を育むことが大切との結論に至った。 〈課題〉 ○長年に渡って積み重ねられてきた、SSN諸団体の多様な活動と豊かな経験を生かし、変化する社会に対応させ、5年後、10年後へとつなげていくことが求められる。	・学校で児童と地域の人々があたたかく関わり合う場づくり	・学習室、自然観察園（仮称）等を整備、工夫し、PTA、防犯ボランティアの見回りコース等として、児童とふれ合ったり、環境整備等の活動に参加したりできるようにする。	①PTA保護者、地域の方々が「学校に行きたい。」「学校づくりに参画したい。」と感じているか。	・アンケートで学校・家庭・地域が連携した防犯、防災などの取組について、肯定的な回答の割合は保護者、地域ともに9割を超えた。	A	・保護者、地域の方々が参観、参加、参画できる場面を具体的に示し、学校HP等で周知する。 ・学習室、自然観察園等を工夫し、PTA、防犯ボランティアの見回りコース等として、児童とふれ合ったり、環境整備等の活動に参加したりできるようにする。【継続】	学校運営協議会等において、学校と家庭、地域が率直に話し合い、ともに学校をつくる雰囲気ができつつあることが、成果として実感できる。教職員や児童が学校運営協議会に参加するなど、お互い率直に語り合うような場、機会があるとよりよいのではないかと。
		・子どもの学び、成長を支援するSSN諸団体による活動	・「親和的なコミュニケーション」をキーワードとして、学校運営協議会とSSNを一体的に推進する仕組みをつくる。	②SSNの活動を親和的なコミュニケーション力の育成につなげていくことについて、関係する人々の意識を高めることができたか。	・参集しての会議を行い理念を共有できた。「SSNの活動は、子ども達の成長や学びにつながっている」について、地域関係者の肯定的な回答の割合は9割を超えた。	A	・例えば鯉のぼり掲揚、安全見守り・見回り活動、環境整備活動といった協働活動について、HP等に掲載し、特に保護者世代の関心・参画意識を一層高めていく。	
4	〈現状〉 ○教員等の意識調査の結果から、全体として職務にやりがいや満足感を感じている。具体的には、「児童に学力が身に付いたと実感したとき」「児童と協働して成果をあげたとき」「児童により変容が見られたとき」「保護者や地域、児童から感謝されたとき」にやりがいや満足感を感じるとの肯定的な回答が多い。 〈課題〉 ○教員の時間外在校時間には、いわゆる下げどまりの傾向が見られる。また、教職員間に差が見られる。	・子どものよい変容を見取り、評価し、学びがいを実感できる教職員研修	・学校評価に係るアンケートの内容項目を見直し、より子どもの成長、よい変容を共有、実感できるようにする。	①アンケートの回答率を維持向上させるとともに、子どもの成長、よい変容を共有、実感することができたか。	・学校評価に係る保護者アンケートの回答率は、昨年度と比べ約5%低下した。全体的に見ると肯定的な回答の割合が高いが、子どもの主体性や自己肯定感に関する項目で肯定的な回答の割合が低くなる傾向が見られる。記述欄には、肯定的な意見、教職員への感謝の言葉、学校での学習・生活に関する多種多様な要望が挙げられている。	B	・教職員の「教育に携わる者として自ら成長するとともに、児童とともに学び、子ども一人ひとりの力を引き出し、伸ばしたい」という思いを支えるため、学校自己評価の手法等について工夫改善を図る。	特に、主体性や自己肯定感に関わる事柄について、子どもの姿は学校と家庭、地域で異なる。また大人の理想が高くなり、評価についても、保護者の世代として相当な根拠を求めようとする傾向があるのではないかと。学校評価に係る資料を適切に示すとともに、教職員、児童の努力、頑張りがより一層認められ、肯定的に評価される仕組み、基盤となる相互の関係性を築くことが大切である。
		・授業の質を高め、やりがいや満足感を一層高めるための業務改善、学校行事等教育活動の工夫改善	・児童、教職員の実態を踏まえ、デジタル化をはじめ業務改善により生み出される時間と労力を、授業実践や学校行事の工夫改善にあてる。	②教職員の意識調査について、高いやりがいや満足感を維持するとともに、業務改善による負担感軽減を図ることができたか。	・「高いやりがいや満足感を維持するとともに、業務改善による負担感軽減を図ることができたか」について、肯定的な回答をした教職員の割合は約8.5%だった。 ・学校自己評価システムシートを踏まえた授業実践・研修、学校行事等の工夫改善、さらには児童保護者、地域が参画した協働・評価・改善のサイクルが働き始めた。	A	・限られた時間、物、予算、そして人により教育活動の質の維持、向上を図るため、PTA保護者、SSNとの協働を推進する。	